12月1日号 区のお知らせ インタビュー全文

——初めに、人権擁護委員の活動について教えていただければと思います。主に、人権相談、人権啓発、調査救済の3つの活動に携わられているということですが、人権相談では、どのような相談を受け、どのように対応されているのでしょうか。

(地区代表) 寄せられる相談は、DV、セクハラ、いじめ、インターネットでのプライバシー侵害や誹謗中傷等、同和に関すること、隣近所の気持ちの行違いなどいろいろな内容があります。

(メッセージ担当委員 A) 相談を寄せてきてくれた方には、寄り添って、お話をじっくり聞いて傾聴するという心を掛けています。

(人権の花担当委員) 人権相談のドアを開くまでには、きっとすごく勇気が必要だと思うんですね。それを乗り越えて相談してくださった方の、初めはたくさん抱えられている思いが、少しでも整理されて、ご自身なりの着地点のようなものを見付けられて、最後には少しでも肩の荷を下ろしていただけるように、お話をお聞きすることができればと思っています。

——今回、3面ではインターネットでの人権侵害について取り上げていますが、インターネットでの被害について相談があった際にはどのように対応されていますか。

(地区代表) インターネットでの被害に遭われた相談者の方は、投稿された内容がインターネット上にどんどん広まっていってしまうことへの不安を抱え、パニック状態の方もいらっしゃいます。ただ、人権擁護委員には直接的に投稿を削除するような権限はありません。まずはご本人に掲示板等の管理者への削除依頼を試みていただいて、それでも削除要請に応じない時や削除要請のやり方がわからない場合は法務局をすぐにご案内しています。

インターネットでの被害は、ひとたび起こってしまうと中々対応が難しい面がありますので、だからこそ、私たちは、インターネットでの人権侵害に関する人権教室*など、これを事前に起こさないための啓発がとても大事だと思っています。

(人権の花担当委員) 今は、小さいお子さんでもスマートフォンを持つ時代ですので、できれば小学校低学年などのうちから、SNS関係のことなどを人権教室で取り上げていけるとよいと思っています。

——子ども担当委員は子ども担当委員を長年務められてきたとお聞きしました。

(子ども担当委員) 子どもからの相談を受けていると、SNSなどで投げ掛けられる言葉は、年々悪質化しているという印象を持っています。

今、子どもが直面している悩みとして最も多いのは、差別、仲間外れです。昨日まで登下校で一緒に歩いていた友達が急によそよそしくなって口もきいてくれない、昨日まで一緒に遊んでいて一緒に話していたのにある日突然無視されるようになってしまったというような相談がしばしばあります。いじめている側の子も、本当はいじめたくないのだけれど、グループで一緒にやらないと今度は自分がいじめの対象になってしまうから、自分を守るためにいじめに加担しているというようなケースです。

——そういった悩みを抱えた子どもに、どのようなことを伝えられるのでしょうか。

(子ども担当委員) まず心掛けているのは、子どもは表現力が未成熟な面もあるからこそ、その話到最后まで口を挟むことなく耳を傾けて、それからいろいろなサポートのアプローチをするという事です。また、子どもは非常にデリケートですから、話を聞いていく中で、これだけは言いたくないという部分が見え隠れすることがあるので、その点には特に留意しています。

(地区代表) 本当は言いたいんだけど、オブラートに包んで話している、その奥にある思いに辿り着けるかどうか、「この人、自分が知っている大人とちょっと違うかな。じゃあ言ってみてもいいかな」とそう思ってもらえるかどうかだと思っています。聞いて、聞いて、聞いて、一緒になって悩んで、どうやって解決するのがいいかというのを一緒に探して。こちらからあしなさいとかこうしなさいとか言うのではなく、「そうだよ、あなたがどう思って、どう考えているのか分かった。じゃあそれを、どういうふうにしていこうか」という具合です。

(子ども担当委員) そのうえで、仲間外れにされて悩んでいるという子どもには、例えば、「今すぐ行動に移さなくてもいいから、少しずつ皆の様子を見て、猫が好きだとか、スポーツでこんなことが好きだというような共通点を見付けて、そこからそっと入っていったらどうだろう」というような話をしています。

同時に必要なのは、教育を通じて、いじめをしているグループのボスの意識を変えるということで、これが結局一番近道なのではないかと思っています。ただ、時々、仕返しが怖いから、あるいは信用ができなくて、学校の先生にも親にも言うことが憚られるという相談もあります。こういった場合、担任の先生に言いづらかったら保健の先生でもいいし教育委員会でもいいんだとサポートするのですが、根が深いときは中々簡単にはいかないこともあります。

(地区代表) 大震災のときに、避難をして転校した小学校で差別に遭って児童がいじめられているという相談がその家族からありました。同じ学校の中でのことでもあり、また、いじめている子の家族たちといじめられている家族は顔見知りの関係でもあるので、^{おおごと}大事にはならないように解決出来ないだろうか。同じ地域と一緒に住んでいるのだから、そのことに思いを致して、いじめをしている子やその親に気が付いてもらえればきっと改善すると思うと相談者は言いました。そこで、委員から校長先生へ相談者の意向を伝えました。その後、いじめはいつの間になくなっていったということでした。

同じ地域、同じ学校の中の者同士、本当に難しいこともあります、一つの例としてのお話です。

——人権擁護委員は、相談を受けるなどした後、調査救済にも携わられることがあるんですね。具体的にはどのように携わられているのでしょうか。

(地区代表) ご相談を受けて、その内容が人権侵害に当たる可能性があるというような場合、法務局において相手方や関係者の方の任意のご協力のもと調査をしていくこともあります。その場合、法務局の職員が出向いて、相談者の方と相談者から見て相手方に当たる方の双方からお話を伺うのです。比較的^{比較的}に地域のことなどを分かっている人権擁護委員がご一緒することもあります。初めのご挨拶の時などに、出向いた先が学校や施設などであれば、そこに飾られた物につい

て「こちらの方々の作品ですか」というようなお話をすると、少し場が和んだりすることもあります。

調査後、必要に応じ「措置」を講じているのですが、これには強制力はありません。相談者の方がそれ以上のことを望まれる場合には、法テラスや弁護士などへの相談を案内することになります。

——語りかけられる言葉の一つ一つからは、権限に制約がある狭間の中で、だからこそ、いかに伝えて、理解してもらおうのかということ、広い意味での啓発が要にもなってくるのかと感じさせられます。これまでのお話の中で、人権教室や教育などを通じた人権啓発についても触れていただいてきましたが、改めて、啓発に懸ける思いをお聞かせください。

(メッセージ担当委員 A) 人権侵害が起こらないようにする「予防」が非常に大事だと思っています。あるとき消防官の友人と話をしていて、「自分たちの一番の仕事は火事を出さないための予防なんだ。火事が起こってしまったら、家財を失ったり、酷い時には人が亡くなってしまったりする。だから、それを未然に防ぐために、小学校などを訪問して、防火教室をやるんだ」と教えてくれました。それを聞いて、はたと、そうだよな、人権も予防だよなと思いました。

ですから、人権教室などで、人の心を踏みにじるようなことをしてはいけないということを子どものうちから伝えて、大人になってからも人権侵害をしないように種を蒔くということをやっていたらと思っています。

(人権の花担当委員) 私は、春先、学校にプランターと土と種を持って行って、子どもたちにお花を育ててもらって「人権の花」という活動を担当しているのですが、その際に中心に据えているのは、命の大切さということです。種を蒔いて、お水をやって、お日様を浴びて…ということが、子どもたちもまた一人の人間として生きていくという意味で、食事を取って、着るものを着て、勉強をして、遊んで…という子どもたちが元気に育つ権利と知らず知らずのうちに繋がっていると思うんです。そういったことを子どもたちに伝える機会をいただけたのは、本当に良かったなと思っています。

——ここまで、人権擁護委員の活動についてお話を伺ってきましたが、まずもって、「人権」というと、どうしても言葉が硬いというような印象もあるかと思います。人権と聞いても中々身近に感じづらい方もいらっしゃるかと思いますが、人権擁護委員の皆さんは、人権についてどのように捉えられていますか。

(メッセージ担当委員 B) 私自身、人権教室で人権について子どもたちに話すとなって、人権ってなんだろう、どういうふうに子どもたちに説明したらいいだろうと、初めて真剣に考えました。人権というのは、そこにいろんなことが集約されていますけれど、皆それぞれが自分らしく人間らしく生きる権利を持っている、本当に人間の基盤の部分なんですね。そして、周りの皆もその権利を持っていて、皆その中の一人だからお互いに人権を尊重して生きなければいけないんだよということなんです。

今、日本は平和ですからあまり意識しないで済んでいるかもしれませんが、でも実は社会の様々な面、人間関係などで関わってくるものですから、意識付けていくことができればよいなと思っています。

(子ども担当委員) 人権という大上段で構えると、子どもたちにとって、あるいは大人でも中々難しいですから、人権という論の中に含まれる差別やいじめといった具体的な問題とともにこれを捉えていくというのも一つの方法だと思います。

(地区代表) 30年程前、幾人かの知人とともにアメリカの南部へ行ったことがあります。

到着したその日の晩、ホテルの人が私たちの荷物を運ぶためにカートに載せてくれたんです。ところが、知人の一人が「そこから私のかばんを降ろしてくれる？でも、降ろすのはあなたじゃない。他の人を呼んできて降ろしなさい。私のかばんに触らないでくれ」と言ったんです。そのホテルの人はブラックでした。その知人は、自分のかばんを黒人に触られたくなかったんです。

それから2、3日して街へ行きました。デパートへ入ろうとすると、入口に「ホワイトオンリー」と書いてあって、隣にもう一つ入口があるんです。「やっぱり、南部だもんね。こっちへ行こう」と言って私たちはそのもう一つの入口へ向かおうとしたのですが、ところが先程の知人はホワイトオンリーと書かれた入口へ行くというんです。「だめだって、私たちはイエローでしょ」と、私たちがそう言っても知人は聞かずに行きました。そしたら、もちろん入口を塞がれました。「向こうへ行け」

私はその知人の行動が物凄くショックでした。

一方で、私たちはこのとき、こんな経験もしました。路面電車に乗っていたとき、高校生のグループに通路を通せんぼするいじわるをされて、降りる予定だった駅で降りられなかったんです。「どうしよう、どうしよう。次の駅では絶対に降りないと、ホテルへ戻れない」と言って、焦っていました。すると、それを見ていた年配のホワイトの紳士が、「君たち、なぜそんなことするんだ。あの人たちは降りるんだ。それなのに君たちがそうやっているから、降りられないだろう。そういうことはしてはいけない」ということを言ってくれたんです。そのおかげで、私たちは無事に電車を降りることができました。

人種差別を正そうとするホワイトもいれば、有色人種として同じく差別される立場にありながら、ブラックを差別するイエローもいます。

日本人はあまり人種という差別は感じずに生きている人が多いと思います。人権教室で子どもたちに「自分はホワイトかイエローかブラックか、どう思いますか」と尋ねると、ブラックという子はいませんが、イエローだと思うという子とホワイトだと思うという子が同じくらいなんです。自分たちはホワイトだと思っているんですね。

人権について考えていくうえでは、差別について知ること、今の社会に対する正しい知識・認識を持つということが、人権侵害をしないためにも必要だと思います。ですから、人権教室では、「このおばさんも差別されたことあるんだよ」という話をするんです。すると、皆かえって親近感が湧くようです。

——これからの人権擁護委員の在り方について、どのような存在でありたいと思いますか。

(地区代表) 人権擁護委員は、もしかしたら何か「人権の塊」のような特別な存在に思われるかもしれませんが、全くそんなことはなくて、皆様と同じ一区民で、その一区民がたまたまお役目をいただいているにすぎませんから、人権という難しい話をやさしくして伝えていければと思います。

(子ども担当委員) 今、世田谷区の人権擁護委員はわずか20人ですから、どうしても限界がある中で活動をしています。今後は、やはり、人権擁護委員の活動の根拠や体制の強化も必要だと思っています。

(メッセージ担当委員 B) 現在、人権メッセージ関係で人権教室をできているのは、毎年、60校に1校だけなんです。非常に限られてしまっていますから、学校との積極的な連携等を得て、もっと人権について知ってもらい、考えるといった機会を作っていけたなら、本当にありがたいと思います。

——最後に、区民の方に向けてメッセージをいただければと思います。

(メッセージ担当委員 B) 私たちは子どもたちが人権について正しく理解し、楽しく学校生活を送れるように小学校の人権教室のお手伝いをしています。そして人権が自分にとっても誰にとってもかけがえのない大切なものであり、それが守られるようお願い、働きかけています。

(メッセージ担当委員 A) 人間の心には復元力があって、私はその力を信じていますが、メンタルに深刻な不調を来してしまうと復元力も働かなくなるので、そこまでに至る前に早めにSOSを出してほしいということを伝えたいと思います。それを助けてあげられる周りの人たちの一人になりたいと思っています。

どうしようもなく悲しい相談もありますが、心から思っているのは、笑顔を取り戻してほしい。その人が笑顔を取り戻す一助になればいいなと願っています。

(人権の花担当委員) 友達にも身内にも話せない、第三者にだから話せることもあると思います。もちろん、私たちには守秘義務があるので、秘密は守ります。

(地区代表) 安心して相談してきてください。相談って、難しいことではなくて、どんなことでもいいのでお話しください。ご相談、待っています。困ったとき、つらいとき、一緒に考えましょう。だから、どうぞ待っています。

* 人権教室についての説明

主に園児や児童生徒、学生の方々を対象に、人権擁護委員や法務局職員が学校等に出向いて「人権教室」を実施しています。

人権教室では、様々な人権のテーマについて、動画や紙芝居などを使って、思いやりの心や命の大切さについて考えてもらったり、お互いの違いを理解し、認め合う「心のバリアフリー」の大切さを学んでもらったり、携帯電話会社等が行うスマホ・ケータイ安全教室と連携して、インターネット上の人権問題について学んでもらったりするなど、様々な工夫をしながら、子どもたちに人権の大切さを伝えています。